

「第1回 東北大学教員の教育活動に関する調査」の概要



杉本 和弘
高度教養教育・学生支援機構
教育評価分析センター



調査票の構成

第1部	回答者の属性や経験・姿勢等を問う設問
第2部	講義型の授業科目に関する取組状況を問う設問
第3部	演習・実験・実習・実技型の授業科目に関する取組状況を問う設問

有効回答率

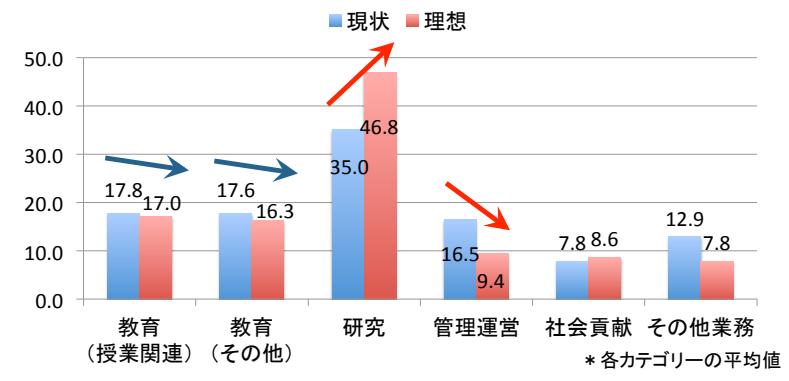
有効回答数	1, 246票
有効回答率	51. 0%

「第1回 東北大学教員の教育活動に関する調査」について

目的	本学教員による教育活動の現状および認識を明らかにすることにより、実効性のある教育改善施策を検討する基礎的なデータ収集
実施主体	学務審議会、教育評価分析センター
実施時期	2016年1月
対象者	2015年12月1日時点で本学在籍の、任期制を含む助教以上の教員(2, 445名)
調査方法	学内便で調査票を教員個人に配布。同封の封筒で学内便にて返送依頼。

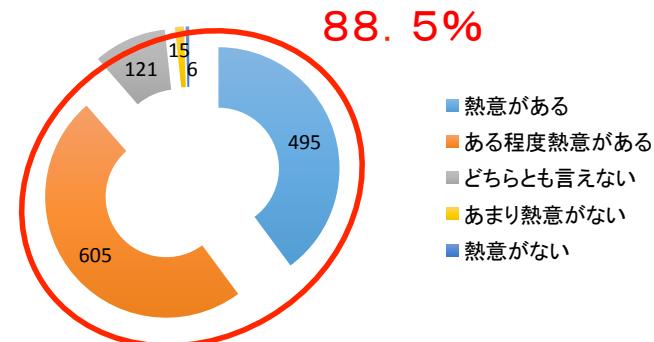
本学教員の教育活動に係る状況(1)

■大学における業務エフォート率の現状と理想



本学教員の教育活動に係る状況(2)

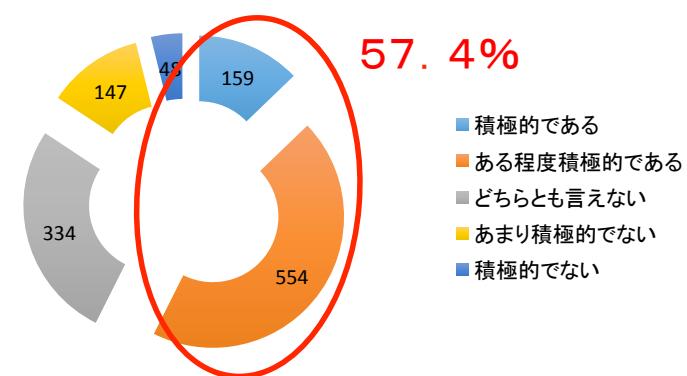
■ 教育に対する熱意



88. 5%の教員が教育活動に対して「ある程度熱意がある」「熱意がある」と自己評価。

本学教員の教育活動に係る状況(3)

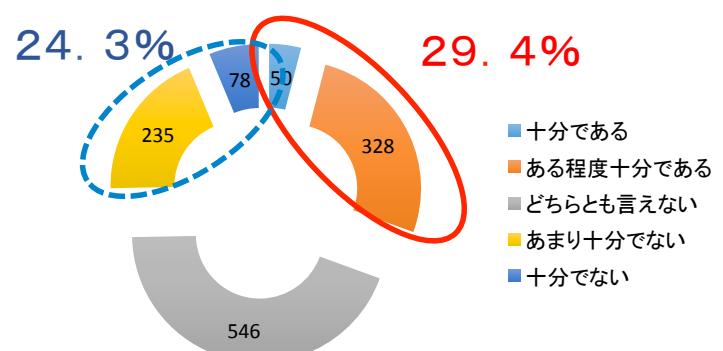
■ 教育改善に対する積極性



57. 4%の教員が教育改善の取組みに対して「ある程度積極的」「積極的」と自己評価。

本学教員の教育活動に係る状況(4)

■ 教育活動に対する本学の組織的支援



教育に対する組織支援が十分だと思っているのは30%。4人に1人は「不十分」と認識。

本日の2つの焦点

■ 第1回教員調査で得られたデータに基づき、次の2つの点に注目

- ① 本学教員は、「授業時間外学修」をどのように認識し、実践しているのか
- ② 「アクティブラーニング」を実施しているのはどのような教員か

授業時間外学修の認識と想定

45時間学修を前提とした授業設計

教育評価分析センター
串本 剛

第2回 東北大学教育調査研究会
2016年7月4日

実質化の鍵を握る3者

- 学生の役割
→授業に出席するだけでなく授業外で十分な学修をする
- 授業担当者の役割
→1単位45時間の学修を必要とする内容をもって授業を設計する(到達目標を設定する)
- 教育課程の役割
→授業外学修の余地を残す(履修登録単位の上限設定＝CAP制)
→必要な学修量に応じた単位割り当てをする

単位制度に関する議論

国際動向

- 欧州における単位制度(ECTS)の広がり(1999~)
- 米国教育省による単位の定義(2011)

国内動向

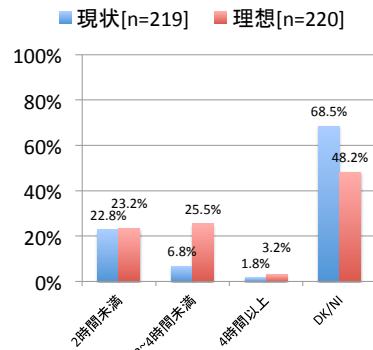
- 授業回数:講義であれば最低でも1単位当たり15時間分の授業を確保する必要があり、これに定期試験期間は含めなければならない【中央教育審議会 2008】
- 学修時間:諸外国の学生と比べて、日本の大学生は著しく短い(1日平均4.6時間)【中央教育審議会 2012】
- 本学の近況:1日の平均勉強時間は授業3.1時間、授業外学修1.3時間(2015年11月2,595名)【東北大学 2016】
- 単位時間:1単位時間45分の慣習を打破する大学の出現【岡山大学 2016】

分析方法

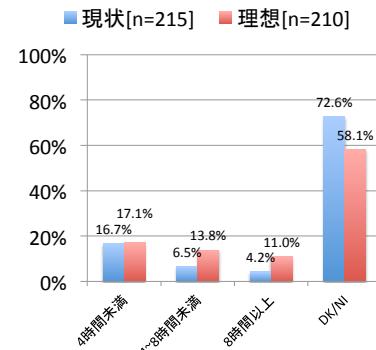
- 標準的には授業内外で90時間の学修が必要とされる、2単位の授業時間外学修に注目
- 時期別:授業形態と科目区分に考慮した集計
→「学期中の週あたり平均」の現状(Q2-4ay)と理想(Q3-4ay)
→「期末の課題に対する取り組み」の現状(Q2-4az)と理想(Q3-4az)
→「わからない/特に理想はない」を含めた100%
- 1学期の合計:毎週の時間×15+期末の時間
→「わからない/特に理想はない」は0換算
→講義型科目(授業が週1回)であれば60時間が標準
→演習型科目等(授業が週2回)であれば30時間が標準

時期別：講義型(全学教育)

学期中の週当たり平均

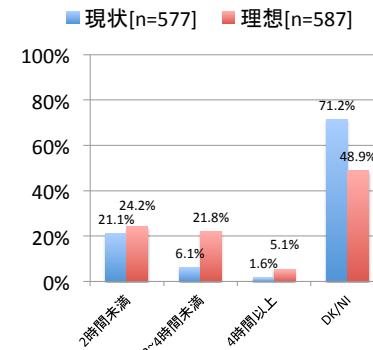


期末の課題に対する取り組み

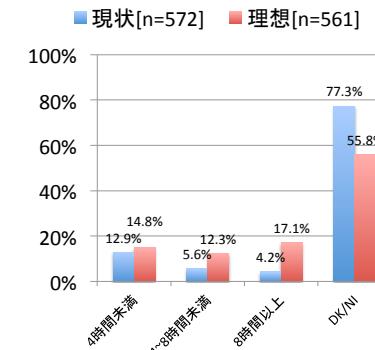


時期別：講義型(専門教育)

学期中の週当たり平均

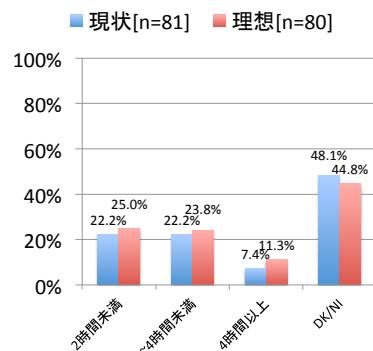


期末の課題に対する取り組み

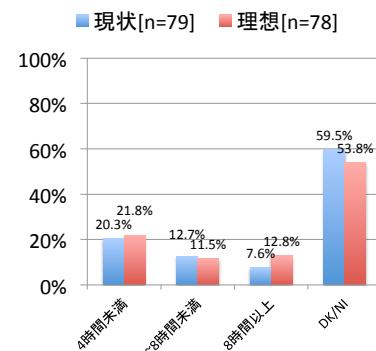


時期別：演習型等(全学教育)

学期中の週当たり平均

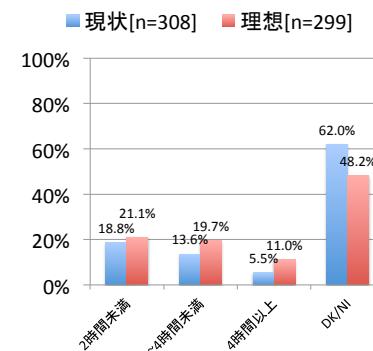


期末の課題に対する取り組み

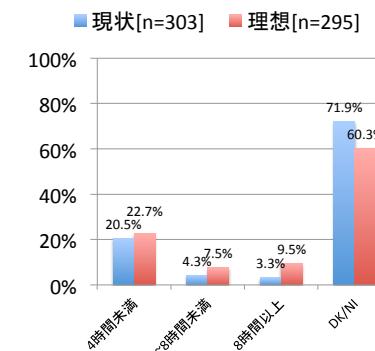


時期別：演習型等(専門教育)

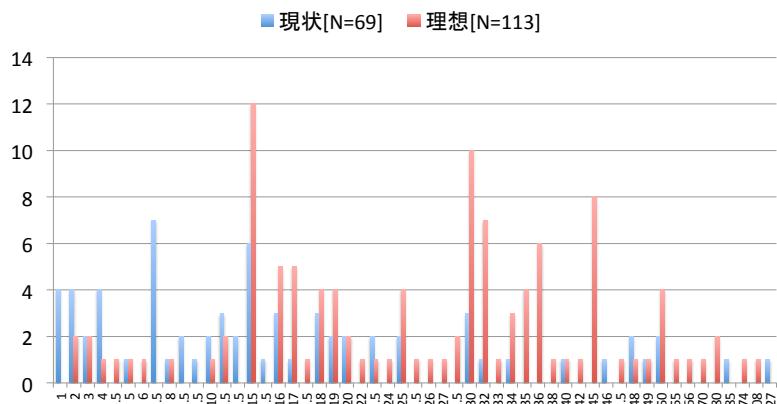
学期中の週当たり平均



期末の課題に対する取り組み

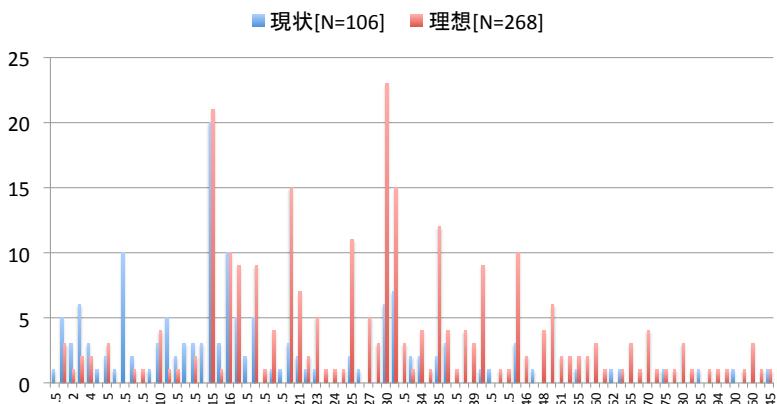


1学期合計：講義型(全学教育)



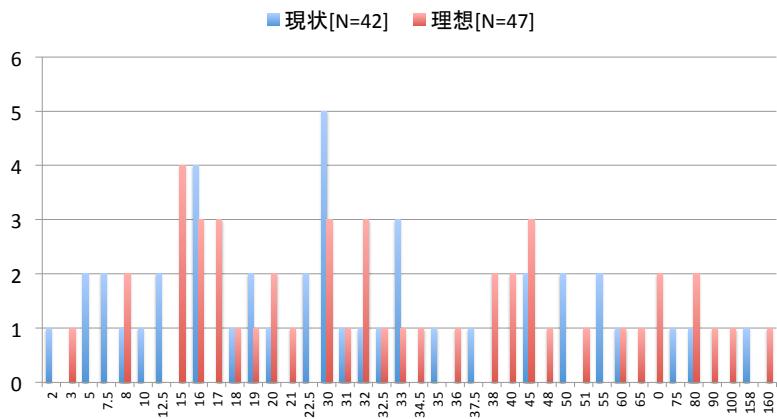
→合計0が現状65.3%、理想42.6%。0を除いた平均値は現状20.3、理想30.9。

1学期合計：講義型(専門教育)



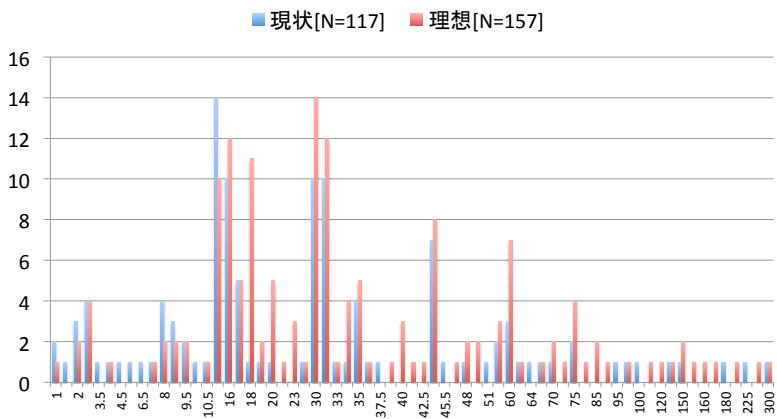
→合計0が現状68.7%、理想41.7%。0を除いた平均値は現状20.7、理想34.3。

1学期合計：演習型等(全学教育)



→合計0が現状46.8%、理想39.7%。0を除いた平均値は現状32.0、理想38.2。

1学期合計：演習型等(専門教育)



→合計0が現状65.3%、理想42.6%。0を除いた平均値は現状34.4、理想41.6。

知見

- 授業評価で聞いているはずの全学教育科目でも、週平均が「わからない」との回答が多い
- 「わからない」よりは少ないものの、「特に理想はない」とされた授業が半数程度ある
- どの類型の授業においても、「現状」の平均値よりも「理想」の平均値が高い
- 演習型等の授業のほうが、講義型の授業よりも「現状」、「理想」とともに平均値が高い

論点

- 期待する学修成果の水準はどのように設定されているのか?
→扱う授業内容、必要な学修量、学生の能力
- 授業担当者の理想よりも、授業時間外学修が短い(と認識される)のはなぜか?
→学生の怠慢、課題を課すことの躊躇、CAP制
- 授業形態と単位数の対応は妥当か?
→演習型等授業の方が学修時間が長い現実
→専門分野によって異なる必要「授業時間」の問題

大学設置基準

21条(単位)

- 「1単位の授業科目を45時間の学修を必要とする内容をもって構成する」
- 講義及び演習の授業時間は15～30
- 実験、実習及び実技の授業時間は30～45

22条(1年間の授業期間)

- 定期試験等の期間を含め、原則35週

27条(単位の授与)

- 履修した学生に、試験の上単位を与える

参考資料

- 中央教育審議会(2008)「学士課程教育の構築に向けて(答申)」
- 中央教育審議会(2012)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて(答申)」
- IDE大学協会(2013)『アカデミック・カレンダーを考える』(現代の高等教育、no. 553、8-9月号)
- 岡山大学(2016)「60分授業・4学期制がスタートしました」
http://www.okayama-u.ac.jp/up_load_files/gakumu-pdf/60m_gakusei1.pdf
- 東北大学 学生生活支援審議会(2016)「平成27年度【東北大学生生活調査】のまとめ 東北大学生の生活」
- 全国大学生活協同組合連合会(2016)「CAMPUS LIFE DATA 2015」

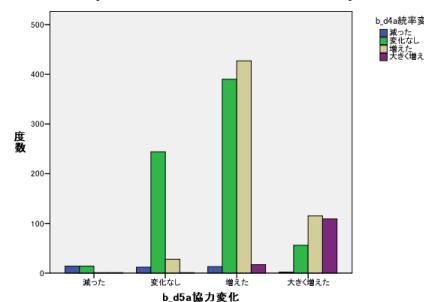
アクティブラーニングへの取り組み状況と その他の項目の関係

教育評価分析センター
松河秀哉

第2回 東北大学教育調査研究会
2016年7月4日

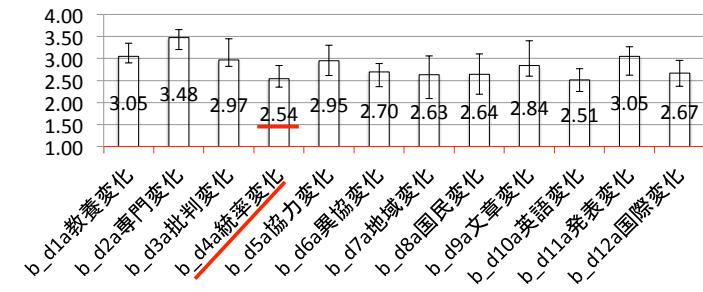
リーダシップを伸ばす要因

- 学修成果調査で収集した全ての項目と総当たり的に関係を調べたところ、「他の人と協力して物事を遂行する能力」の伸びとの関連が最も強かった。(相関係数0.535)



はじめに

- 第2回東北大学の教育と学修成果に関する調査によると
 - 学士課程で身についた学修成果としては「リーダーシップの能力」の入学時点からの変化が最も少ない



他者と協力して物事を遂行する能力

- 学士課程において、これらの能力は
 - 課外においては、部活動、ボランティア、バイト等
 - 正課内においては、講義、演習、ゼミなどにおける議論や発表など、他の学生や教員との積極的な関わりが生じる活動によって涵養されると考えられる
- いわゆるアクティブラーニングとの関連性がうかがえる

アクティブラーニング

- 教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者の能動的な参加を取り入れた教授・学修法の総称。学習者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決能力、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室でのグループディスカッション、ディベート、グループワーク等によっても取り入れられる。

新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて
—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ—(答申), p37

アクティブラーニング

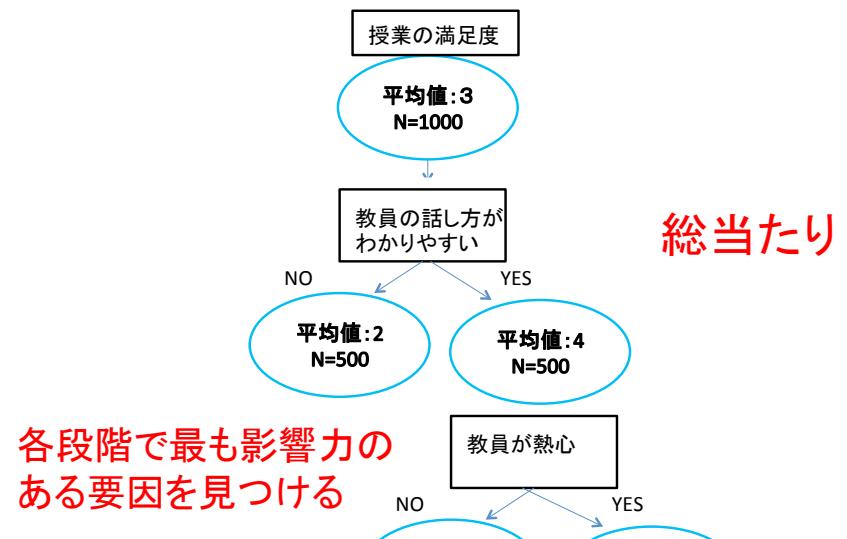
- 一方的な知識伝達型講義を聞くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。

(溝上慎一 (2014) アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換. p7)

アクティブラーニングを促進する要因

- 教員調査のQ2-5では、認知プロセスの外化につながるような5つの活動について、現状を質問している
 - 口頭での質問機会
 - コメントシートの利用
 - 学生同士の議論
 - 意見や考えの発言
 - プрезентーション
- これらに対する取り組み状況はどういった要因から影響をうけているのだろうか?
 - 決定木をもちいて分析

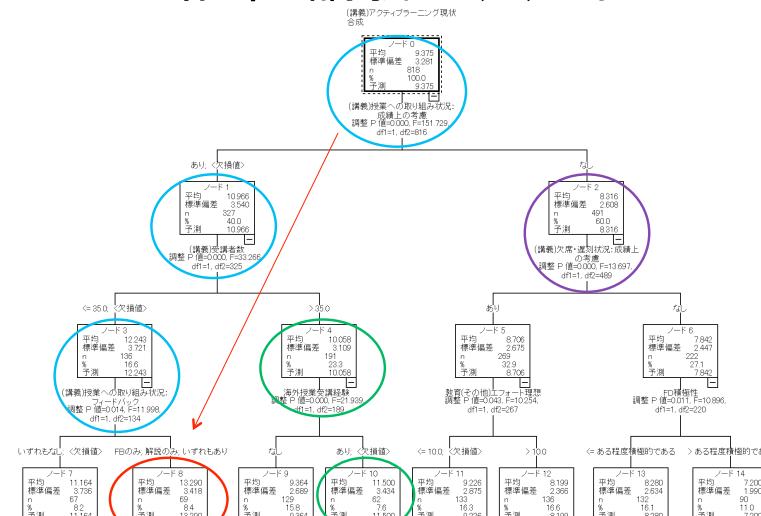
決定木



アクティブラーニングを促進する要因

- 5つの活動に対する取り組み状況を得点化(なし=1、ときどき=2、度々=3、毎回=4)して足し合わせ、統合
- 統合した値を目的変数、その他アンケート項目を説明変数として、Exhaustive CHAIDにより決定木を作成

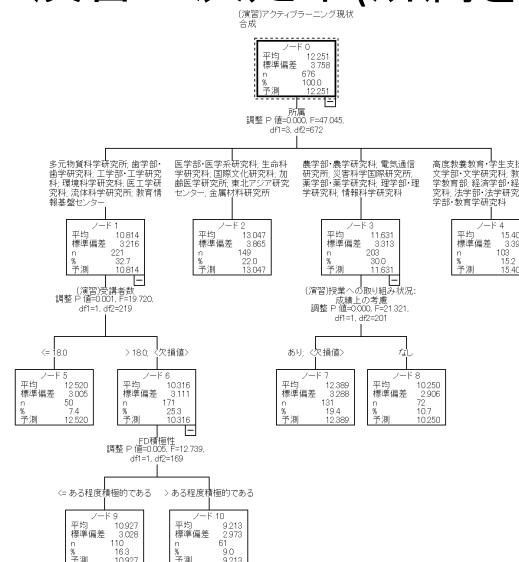
結果：講義の決定木



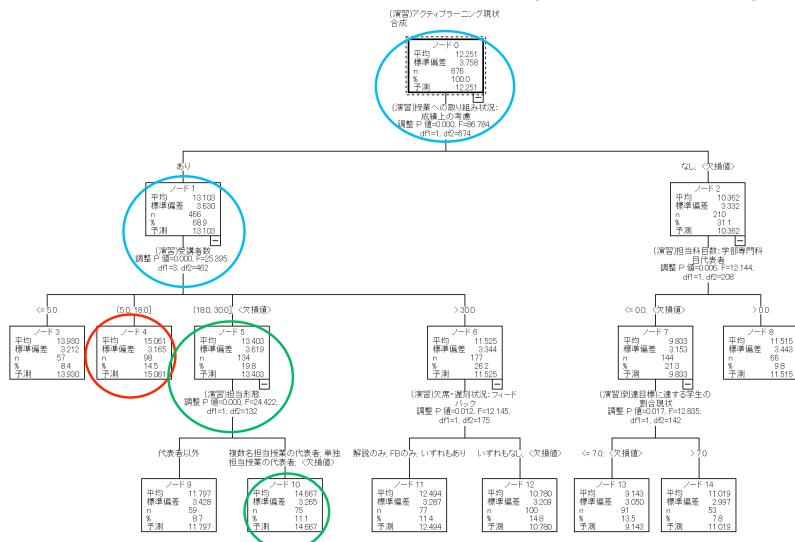
考察

- 講義への取り組み状況を成績に配慮をするかどうかが、アクティブラーニングの取り組みと最も強く関連している。
 - 授業内で学生を「よく見よう」という態度の有無がALの導入に影響する可能性
 - もちろん、AL導入の結果が評価方法に影響しているという可能性もあるが…
- 受講者の人数もALの導入に影響があるが、35人以上のクラスでも、海外で授業を受けた経験がある教員はよりALを取り入れている
 - 海外では一般的なコツのようなものがある可能性

結果：演習の決定木(所属を考慮)



結果：演習の決定木(所属抜き)



考察

- ・ 演習では、講義と比較するとALの導入は多い
- ・ 所属を考慮した場合は、所属の影響が最も大きい
- ・ 所属を考慮しない場合、講義と同様、学生を「よく見よう」という態度の有無がALの導入に影響する可能性
- ・ クラスサイズも影響があり、5名から18名程度が最もALを導入しやすい可能性
- ・ クラスサイズがある程度大きい場合は、教員の関心は重要

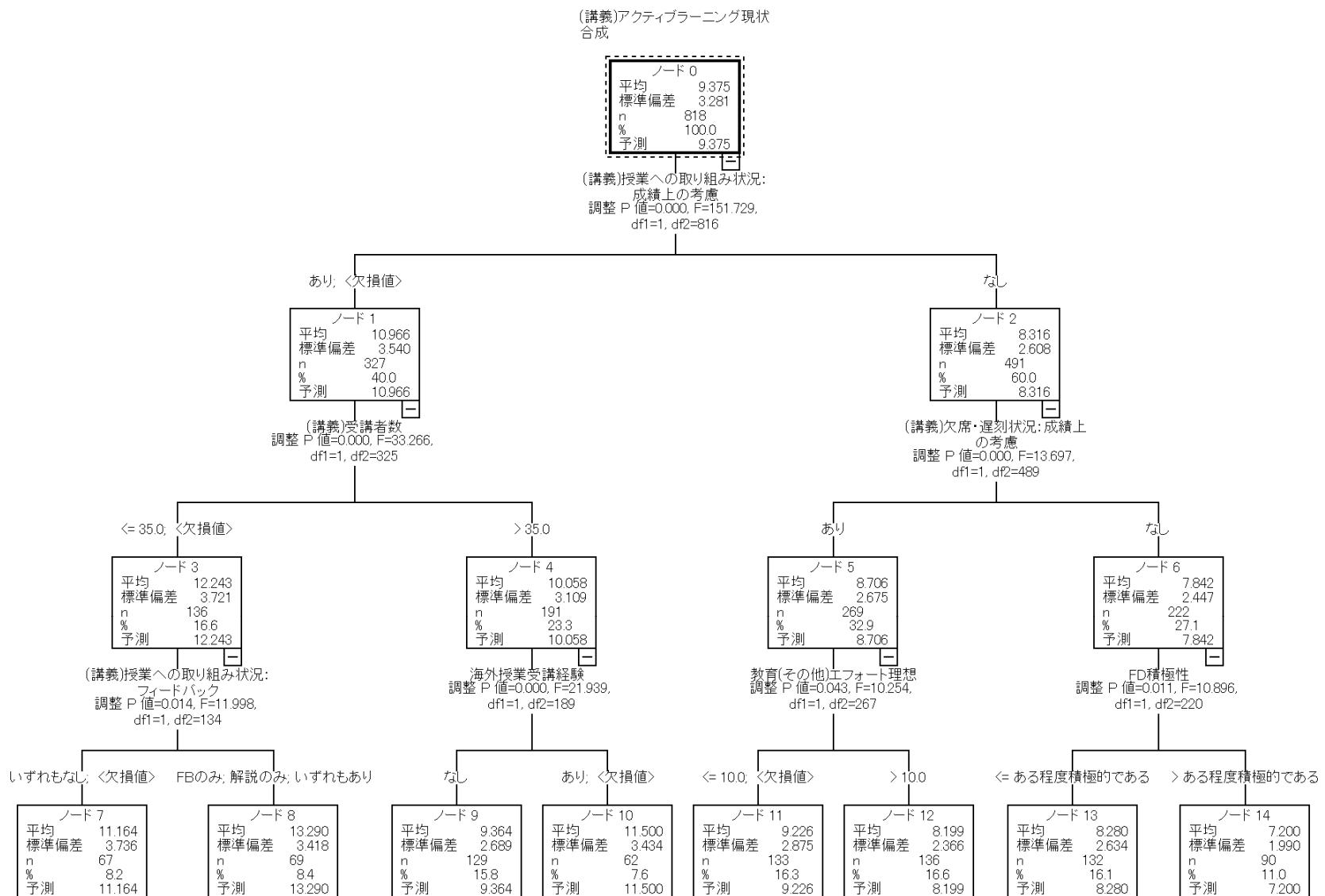
まとめ

- ・ 授業への取り組み状況を成績に配慮したりするかどうかが、ALの導入に要所要所できいてくる。
 - FDに対する積極性などよりも直接的な影響
 - ALは本来、教授法ではなく、学生の学習活動の話であるが、個々の学生の学習活動を把握して評価しようという態度を持っている教員は、学生の学習のために様々な取り組みを実施する傾向があるのかもしれない

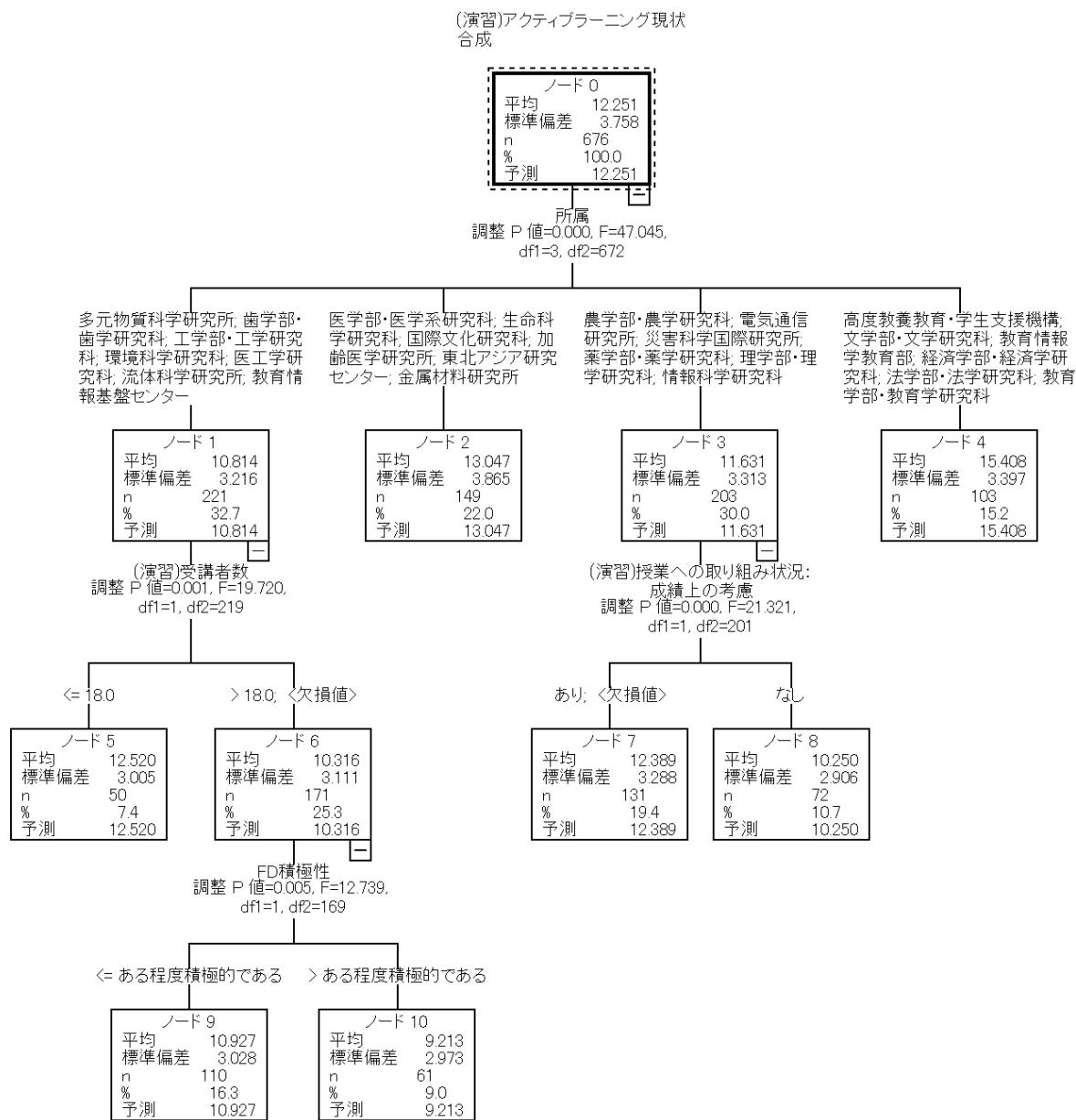
問い合わせ

- ・ 1) 「他者と協力して物事を遂行する能力」を涵養することは必要か？
- ・ 2) 必要だとすれば、どのような学習経験が役に立つと思うか？
- ・ 3) 役に立つ学習機会の提供に際し、障害となっていることがあるか？

結果：講義の決定木

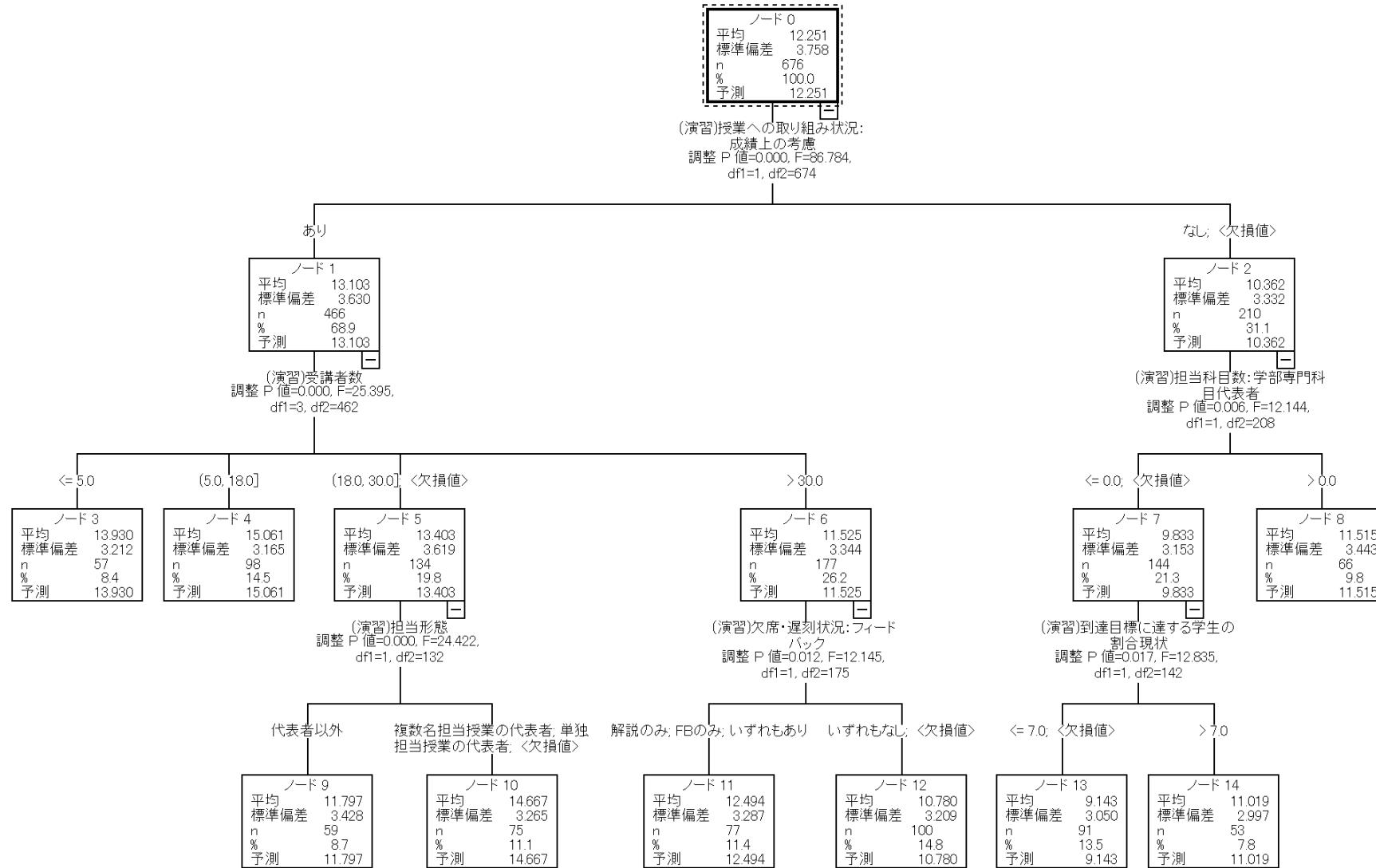


結果：演習の決定木(所属を考慮)



結果：演習の決定木(所属抜き)

(演習)アクティブラーニング現状
合成



○○学部・○○研究科・○○研究所・○○センター

総評	<p>※調査データ全体を概観し、各部局の文脈に即して注目すべき事項を中心に概括してください。</p>
「授業時間外学修」に関する取組み	<p>※「授業時間外学修」について、学部・研究科等における認識（課題意識を含む）や、現在実施している、あるいは今後実施予定の取組みについて記述してください。</p>
「アクティブラーニング」に関する取組み	<p>※「アクティブラーニング」について、学部・研究科等における認識（課題意識を含む）や、現在実施している、あるいは今後実施予定の取組みについて記述してください。</p>

文責： 役職 ・ 氏名 _____